

# 北魏末の北辺社会と六鎮の乱

——楊鈞墓誌と韓買墓誌——

東京大学 佐川英治

## はじめに

北朝から隋唐への歴史展開を考えると、北魏を崩壊に導き、関隴集団といわれる人々の活躍に道を開いた六鎮の乱は重要である。このことは関隴集団の名付け親でもある陳寅恪が注意していたことであつたが<sup>1</sup>、この事件の歴史的な意義を最初に正面から論じたのは、谷川道雄「北魏末の内乱と城民」である<sup>2</sup>。この中で谷川氏は六鎮の乱の反乱の主体を「城民」＝兵士と規定した。しかし、その後、直江直子の北朝後期為政者の出自に関する議論を受け<sup>3</sup>、「武川鎮軍閥の形成」では反乱の指導者を豪族と位置づけ、豪族が郷民を指導して起こした反乱と捉え直した<sup>4</sup>。直江氏は再度「北魏の鎮人」においても、鎮民は必ずしも城民ではなく、郷里社会で生業を営む豪族であつたことを確認している<sup>5</sup>。これに対して川本芳昭は、「郷里」といってもそれは史料を残した漢人の見方であつて、実際に反乱集団を結びつけていたのは部族的紐帯ではなかつたかとする疑問を提起している<sup>6</sup>。一方、唐長孺の「試論魏末北鎮鎮民暴動的性質」は、豪族的な鎮民と兵士である城民を区別しながら、反乱の主体は城民であり、鎮民はむしろこれを鎮圧する側に立ったとして、反乱の主要な原因は鎮民の地位低下ではなく、鎮民と城民の間の階級対立にあるとした<sup>7</sup>。これに対して朱大渭「代北豪強酋帥崛起述論」は、六鎮の乱のみを対象に論じたものではないが、北魏末の混乱期における北辺出身の豪族や酋長の活躍を論じた<sup>8</sup>。近年、薛海波「北魏末年鎮民暴動新探」は、反乱の主体を匈奴や高車の酋長とし、反乱の原因は軍鎮の官員となつた豪強

1 万繩楠整理『陳寅恪魏晉南北朝史講演録』第十七篇「六鎮問題」、昭明出版社、1999年、301-326頁。

2 谷川道雄「北魏末の内乱と城民」『増補 隋唐帝国形成史論』、筑摩書房、1998年。もとは1958年に『史林』41巻5号に掲載。

3 直江直子「北朝後期政權為政者グループの出身について」『名古屋大学東洋史研究報告』5、1978年。

4 谷川道雄「武川鎮軍閥の形成」『増補 隋唐帝国形成史論』、筑摩書房、1998年。もとは1982年に『名古屋大学東洋史報告』8号に掲載。

5 直江直子「北魏の鎮人」『史学雑誌』92-2、1983年

6 川本芳昭「部族解散の理解をめぐって」『魏晉南北朝時代の民族問題』、汲古書院、1998年、173-178頁。

7 唐長孺「試論魏末北鎮鎮民暴動的性質」『山居存稿』中華書局、1989年。もとは黄惠賢との共著で『歴史研究』1964年第1期に掲載。

8 朱大渭「代北豪強酋帥崛起述論」同著『六朝史論』中華書局、1998年。もとは1989年に『文史』第31輯に掲載。

酋帥とそうなれなかった一般の酋長層との内部矛盾にあるとしている<sup>9</sup>。総じて、この反乱が民族問題と深く関わっているという視点は深まりつつあるが、依然として反乱が何らかの格差に対する不満に発したとする見方は変わっていない。

この反乱が北魏全域に広がったことを考えるとき、その背景に広汎な被支配層の不満があったとみるのは当然であり、その性格は分析しなくてはならない。しかし、そうした不満が必ずしも北魏に対する反乱というかたちに結実するかといえ、そうとはいえないのであって、より身近な鎮将に対する反抗や鎮からの逃亡というかたちになって現れたとしてもおかしくはない（実際に『魏書』の中にそのような記述はある）。それにゆえに、この反乱が明確な北魏国家に対する反乱となった理由を追及しようとするれば<sup>10</sup>、なぜ破落干拔陵なる人物が523年頃、六鎮のとくにその西部地域で蜂起したのかという問題を当時の北魏の北辺社会の地域性や特殊性においてより具体的に考えてみる必要がある。ただし、それを知るための破落干拔陵に関する史料は、残念ながら『魏書』に散見される寥々たる記述だけであって全く乏しい。しかし、幸いに近年の墓誌の発見や資料の公刊によって、六鎮の乱の初期に最大の攻防戦の場となった懷朔鎮で破落干拔陵側の包囲軍と戦って亡くなった鎮将の楊鈞と鎮人の韓買の墓誌が世に現れた。本報告ではこの二つの墓誌を手がかりにこの問題を考えてみたい。

## 一 北魏建義元年（528）楊鈞墓誌<sup>11</sup>

来歴不明。本世紀初頭に陝西省華陰県より出土。呉綱主編『全唐文補遺・千唐誌齋新藏專輯』（三秦出版社、2006年）、陳輝・薛海洋編『北魏楊鈞墓誌』（河南美術出版社、2008年）、堀井裕之「北魏・楊鈞墓誌」の訳注と考察（『駿台史学』第144号、2012年3月）、胡海帆・湯燕編『北京大学図書館蔵金石拓本菁華1996-2012』（北京大学出版社、2012年12月）。

### ○史料1 楊鈞墓誌（抄録）

除使持節・都督恒州柔玄懷荒御夷三鎮二道諸軍事・安北將軍・恒州刺史。此寔舊都、粉榆之本。侈同耿亳、富過苑許。地接戎場、人雜夷夏、鳴鏑或聞、胡茄時動。鳥徙風行、昔號難制。公道之以禮、齊之以威。士有百金、戰能三捷。是使莞蒲之盜、解犢捐牛、藜莠之民、獻馬奉糶。復以本號除廷尉卿。取訟連官、受讞方國、寰土用靖、肺石以虛。會茹茹內亂、唐黎播越、綏來觀釁、事委深筭。遂除散騎常侍・假鎮北將軍・撫軍將軍・都督懷朔沃野武川三鎮諸軍事・懷朔鎮大都督。尋授七兵尚書、仍本將軍・北道大行臺。公任揔文武、職兼內外、將昇太階、剋隆鴻範。而運屬橫流、覆舟反噬、鎮堅構逆、遂見攻圖。公親當矢石、嬰城固守。犬羊浸盛、虎豹尚遙、在危在節、處險彌厲。以正光五年八

<sup>9</sup> 薛海波「北魏末年鎮民暴動新探—以六鎮豪強酋帥為中心—」『文史哲』2011年2期。

<sup>10</sup> 下記の【史料5】(C)の「中国を軽んず」という態度に明瞭に示される。

<sup>11</sup> 梶山智史編『北朝隋代墓誌所在総合目録』（明治大学東アジア石刻文物研究所・汲古書院、2013年5月）、N0.447。

月廿九日、遘疾薨於鎮所。天子振悼、群僚悲慟。粵建義元年歲次戊申九月乙卯朔卅日甲申、將歸窆於華山之下。

○史料2 『魏書』卷58 楊播傳附鈞傳

播族弟鈞。祖暉、庫部給事、稍遷洛州刺史。卒、贈弘農公、諡曰簡。父恩、河間太守。鈞頗有幹用、自廷尉正為長水校尉・中壘將軍・洛陽令。出除中山太守、入為司徒左長史。又除徐州・東荊州刺史、還為廷尉卿。拜恒州刺史、轉懷朔鎮將。所居以強濟稱。後為撫軍將軍・七兵尚書・北道行臺。卒、贈使持節・散騎常侍・車騎大將軍・左光祿大夫・華州刺史。

○史料3 『周書』卷22 楊寬傳

父鈞、博學疆識、舉秀才、拜大理平、轉廷尉正。累遷、歷洛陽令・左中郎將・華州大中正・河南尹・廷尉卿・安北將軍・七兵尚書・北道大行臺・恒州刺史・懷朔鎮將、卒於鎮。贈侍中・司空公、追封臨貞縣伯、諡曰恭。(中略)屬鈞出鎮恒州、請從展効、乃改授將軍・高闕戍主。時茹茹既亂、其主阿那瓌來奔、魏帝遣使納之、詔鈞率兵衛送。寬亦從行、以功拜行臺郎中。時北邊賊攻圍鎮城、鈞卒、城民等推寬守禦。尋而城陷、寬乃北走茹茹。後討鎮賊、破之、寬始得還朝。

正光元年(520)正月、柔然の内紛によって国を追われた阿那瓌が洛陽にいたると、朝廷は恒州刺史楊鈞を懷朔鎮將に任じて阿那瓌を国に送り返した〔史料1〕〔史料3〕。尚書左丞の張普惠はわざわざ北魏の国力を費やして柔然の復活を助けることになるに反対するが、朝廷は従わなかった<sup>12</sup>。正光四年(523)四月頃<sup>13</sup>、沃野鎮人破落干拔陵が反乱をおこす。懷朔鎮は破落干拔陵の將衛可孤に一年以上囲まれたが援軍は来なかった。楊鈞は賀拔勝を朝廷から鎮遠將軍・假征北將軍・都督北征諸軍事に任じられた臨淮王彧のもとに派遣して危機を告げさせる<sup>14</sup>。賀拔勝は決死の少年十余騎でもって夜に囲みを破って雲中の臨淮王彧のもとへいき、援軍の約束を得て帰る。楊鈞はまた賀拔勝を武川鎮に派遣するが、武川鎮は陥落した。楊鈞が正光五年(524)八月二十九日に亡くなったのちも〔史料1〕、懷朔鎮城民は楊鈞の子の楊寬を推戴して抵抗を続けたが、孝昌元年(525)三月に破落干拔陵の別帥王の也不慮らの攻撃によってついに懷朔鎮は陥落し<sup>15</sup>、楊寬は柔然に逃げる〔史料3〕。

<sup>12</sup> 『魏書』卷78 張普惠傳。

<sup>13</sup> 『資治通鑑』卷149 梁紀5に、「考異曰、魏帝紀「正光五年破落汗拔陵反、詔臨淮王彧討之、五月、彧敗、削官。」按令狐德棻周書賀拔勝傳「衛可孤圍懷朔經年、勝乃告急於彧。」然則拔陵反當在四年。」とある。

<sup>14</sup> 『周書』卷14 賀拔勝傳。

<sup>15</sup> 『魏書』卷9 肅宗紀。なお、標点本は「王也不慮」を人名と読むが、『魏書』卷82 常景傳には「洛周遣其都督王曹紇真・馬叱斤等率衆薊南、以掠人穀、乃遇連雨、賊衆疲勞。」とあり、『資治通鑑』卷151 梁紀7の同条の胡三省注に「時杜洛周・葛榮等作亂、其軍中將領無不加以王爵、曹紇真以都督加王號、故曰都督王。」とあることからすれば、ここは別帥王の也不慮と読み、また『周書』卷15 于謹伝に「西部鐵勒酋長七列河」とあるのを『北史』本伝、『通典』卷156 兵9はともに「也」とすることからすれば、「也」は「七」の訛とみなすべきであろう。

## 二 北齊天保七年（556）韓買墓誌<sup>16</sup>〔写真1〕

2003年晋中市榆次で出土。原石は晋中市榆次区文物管理所で所蔵。太原市三晋文化研究会編『晋陽古刻選』編輯委員会『晋陽古刻選・北朝墓誌』（山西出版・山西人民出版社、2008年1月）。劉沢民主編『三晋石刻大全・晋中市榆次区卷』（山西出版伝媒集団・三晋出版社、2012年12月）に「北齊□買墓誌銘」として収録。

### ○史料4 韓買墓誌（全文）

□諱買、字買奴、遼東徒何人也。昔招搖降神、序星辰、而作帝、龍魚叶祉、播清明、以御天、道溢含文、事光甄耀。聖烈不窮、貽厥孫子、承家命氏、雄據遼碣、擇木來遊、遂居朔野、世緒彌昌、嘉聲日競。祖冠軍將軍懷朔鎮將、有德有業、被於物談。父車騎大將軍儀同三司朔州史君、立功立事、績書王府。公感雷電之精、受山陵之氣、天表魁傑、骨相英奇、孝友聞於邦國、任卹著於鄉部、器度弘遠、不拘近細。早結蕪庭之志、幼懷康俗之心。加以雅好詩書、尤重干戚、深圖峻概、卓矣難窺。出身殿中將軍・員外司馬督、尋轉軍主。于時、皇猷外闢、國步內康、置戍交河之南、列候天山之北。而獯夷猾夏、密邇亭障、來若驚禽、去同激天。秋風曉渡、已見胡塵之逼、漢月夜圓、便聞鳴鏑之響。公焱勇紛紜、威動開塞、追亡逐北、靜漠空山。以功加寧遠將軍・羽林監。正光之末、數屬屯否、餓隸黥徒、蝟起梟磔、役散驪山之下、盜聚綠林之中、雜種曾渠、遠近相扇、懷朔一鎮、獨在重圍。劉琨處并、匹此非急、馬敦居汧、方茲尚緩。王師赴援、失律相尋、物情崩駭、人懷去就。公心俟本朝、確乎不拔、誠通皎日、氣厲嚴霜。道窮力竭、將餌虎口、壯節雄心、恥見降沒、□天年催、奄隨化往。以魏孝昌元年三月七日卒於朔州、時年卅五。閭巷罷歌、軍府行哭、朝廷哀傷、追加榮命。乃贈使持節燕恒肆三州諸軍事・恒州刺史・太尉公。惟公材力絕人、忠勇貫世、軍謨將略、非亡韓白之流、拔劍據鞍、豈直關張之敵。懸鼓鐘於匈鬲、納山藪於心衿、輕生重義、遺財好士、空負匡時之用、未展濟世之功。而地接窮桑、邑連負夏、積善既徵、高門且驗。是生三虎、剋誕八龍、英傑出於良弓、將相光於堂構、金張掩其貂珥、袁楊愧其公輔。有子如此、何恨幽泉。越以天保七年八月十八日、遷葬於晉陽東北七十里、看山之南。式雕方石、圖美泉門、乃作銘曰。

修々巨海、弈々高山。氣流精躍、鍾美英賢。公侯繼軌、世祿相傳。派流不已、自東徂西。惟公挺生、是稱世德。秉文資武、博見多識。言成世師、行為士則。望雲驥首、憑風矯翼。世途洧剝、關河板蕩。忠勇奮發、釋位同獎。朝野斯賴、邦國終仰。功業未申、但年忽往。哀結冕旒、禮追文物。方即夜臺。壘霧蒼芒、松風蕭瑟。一沈蒿裏、三千見日。

<sup>16</sup> 『北朝隋代墓誌所在綜合目錄』、No.760。

本墓誌の姓氏は不明であるが、『晋陽古刻選』は「韓買、字買奴、遼東徒何人、北齊安德郡王韓軌之父」とする。山西省文物局のHPには全国重点文物保護単位である榆次区什貼村西北の什貼墓群を紹介して、「地表には六基の封土が現存しており、当地の人は“王墓”と呼んでいる。墓葬は黄土高原の丘陵上に散在しており、面積は約8万平方メートルである。史料の記載によれば、古墓中の一つは北齊中書令韓軌の墓である。これらの六基の封土墓とすでに調査された別の一基の無封土墓はみな韓軌の家族墓葬とみなせる。墓葬はみな天井・過洞・斜坡の墓道かなる土洞墓である」<sup>17</sup>とある。韓軌は『北齊書』巻15及び『北史』巻58に「太安狄那人」とあり、懷朔鎮の出身者であるが、父の名は記していない。本墓誌はこの墓群の中から出土したものと思われるが、この墓群を韓氏のものとし、韓買を韓軌の父と断定した根拠は不明である。ただし、徒何は三国魏から昌黎郡に属し、昌黎の韓氏には『魏書』巻42韓秀（昌黎人）や『魏書』巻60の韓麒麟（昌黎棘城人）がいる。また同じく『晋陽古刻選』収録の墓誌に、出土地は異なるものの、山西省晋中市祁県白圭村出土の韓裔墓誌があり、「昌黎賓屠人」としている。その父の韓賢については『北齊書』巻19及び『北史』巻53に「廣寧石門人」とある。廣寧郡は北魏末に朔州の桑乾郡を改めて広寧郡とし、并州の界内に僑置した郡であり、石門はその領県である<sup>18</sup>。羅新「北齊韓長鸞之家世」は、朔州はもともと懷朔鎮に置かれ、その郡県は并州の界内に僑置されたことから、韓賢は懷朔鎮出身者であるとする<sup>19</sup>。また同じく『晋陽古刻選』に昌黎郡龍城県の人なる韓祖念墓誌があるが、これも六鎮出身の人である可能性が高い。他に遼東の人で懷朔鎮に移った人には可朱渾元もいる<sup>20</sup>。恐らく後燕滅亡時に多くの遼東遼西地域の人が六鎮に移されたであろう。従って断定する根拠はないものの、遼東徒何を本貫とし、代々懷朔鎮に暮らしたこの墓誌の主が韓氏である可能性は考えられる。本報告ではひとまず『晋陽古刻選』の断定には何らかの根拠があるものとみなし、韓買の墓誌としておく。

韓買は殿中將軍・員外司馬督に起家し、ついで懷朔鎮の軍主に転じた。その後、墓誌には柔然と戦った様子がみえる。となれば、この時、楊鈞の部下であった可能性が高い。この功績によって寧遠將軍・羽林監を加えられた。しかし、正光末に起こった六鎮の乱により懷朔鎮は包圍され、韓買は孝昌元年（525）三月七日に朔州で亡くなる。この場合の朔州とは懷朔鎮のことであり、これが懷朔鎮陥落の日であろう。楊鈞が亡くなって約半年後のことである。

### 三 破落干拔陵の蜂起

<sup>17</sup> <http://www.sxcr.gov.cn/index.php?m=content&c=index&a=show&catid=53&id=175>

「現存地面六座封土堆、当地人俗称“王墓”。墓葬散布在黄土高原的塬峁之上、面積約8万平方メートル。据史料記載、古墓中其一為北齊中書令韓軌之墓。該六座封土墓和已探明的另1座無封土墓、同為韓軌家族墓葬。墓葬均為帶天井・過洞・斜坡墓道的土洞墓。」

<sup>18</sup> 施和金『北齊地理志』中華書局、2008年6月。

<sup>19</sup> 羅新「北齊韓長鸞之家世」『北京大學學報（哲社版）2006年第1期、2006年。羅氏は韓裔墓誌の「賓屠」は「賓徒」の誤りとする。従うべきであろう。

<sup>20</sup> 『北齊書』巻27に「可朱渾元、字道元。自云遼東人、世為渠帥、魏時擁衆内附、曾祖護野肱終於懷朔鎮將、遂家焉。」とある。『北史』巻53もほぼ同じ。

○史料5 『北史』卷16 太武五王伝

及沃野鎮人破六韓拔陵反叛、臨淮王彧討之失利、詔深為北道大都督、受尚書令李崇節度。時東道都督崔暹敗於白道、深等諸軍退還朔州。深上書曰

(A) 邊豎構逆、以成紛梗、其所由來、非一朝也。昔皇始以移防為重、盛簡親賢、擁磨作鎮、配以高門子弟、以死防遏。不但不廢仕宦、至乃偏得復除、當時人物、忻慕為之。及太和在歷、僕射李冲當官任事、涼州土人、悉免厮役、豐沛舊門、仍防邊戍。自非得罪當世、莫肯與之為伍。征鎮驅使為虞候・白直、一生推遷、不過軍主。然其往世房分、留居京者、得上品通官、在鎮者、便為清途所隔。或投彼有北、以御魑魅、多復逃胡鄉。乃峻邊兵之格、鎮人浮遊在外、皆聽流兵捉之。於是少年不得從師、長者不得遊宦。獨為匪人、言者流涕。(B) 自定鼎伊洛、邊任益輕、唯底滯凡才、出為鎮將。轉相模習、專事聚斂。或有諸方姦吏、犯罪配邊、為之指蹤、過弄官府、政以賄立、莫能自改。咸言姦吏為此、無不切齒增怒。(C) 及阿那瓌背恩、縱掠竊奔、命師追之、十五萬衆度沙漠、不日而還。邊人見此援師、便自意輕中國。尚書令臣崇時即申聞、求改鎮為州、將允其願、抑亦先覺、朝廷未許。(D) 而高闕戍主、率下失和、拔陵殺之為逆命、攻城掠地、所見必誅。王師屢北、賊黨日盛。此段之舉、指望銷平。其崔暹隻輪不反、臣崇與臣、逡巡復路。今者相與、還次雲中。馬首是瞻、未便西邁。將士之情、莫不解體。今日所慮、非止西北、將恐諸鎮尋亦如此。天下之事何易可量。

時不納其策。東西部敕勒之叛、朝議更思深言、遣兼黃門侍郎酈道元為大使、欲復鎮為州、以順人望。會六鎮盡叛、不得施行。深後上言「今六鎮俱叛、二部高車亦同惡黨、以疲兵討之、必不制敵。請簡選兵、或留守恒州要處、更為後圖。」

○史料6 永安三年(530)元彧墓誌<sup>21</sup>

自正光之末、艱虞再起、戍卒跋扈、搖蕩疆塞。

○史料7 太昌元年(532)元顥墓誌<sup>22</sup>

歲在執徐、榆關大擾、王師每喪、獯獫橫行。仍以徒役苦虐吏之浸、流戍積懷歸之思、緣邊万里、影響群飛。

〔史料5〕は六鎮の乱の背景を分析した同時代史料として大変有名な史料である。従って最も信頼に足る史料ではあるが、同時にそれはあくまで朝廷の側からみた分析であって、必ずしも事件の真相を明らかにしたものとはいえない。ここで広陽王淵は六鎮の乱の原因を分析して、四つの原因を挙げている。(A) 洛陽遷都以後の六鎮の地位の低下とそれに伴う鎮民の地位低下、(B) 鎮将の人選の軽視と凡庸な鎮将の収奪に苦しむ鎮民の怒り、(C) 柔然の阿那瓌に対する追討の失敗とそれによって生じた辺民の中国に対する軽視乃至は軽蔑の感情、(D) 高闕戍主による戍兵の侮辱、である。このうち、反乱の直接の引き金として挙げているのは(D)である。このことに関しては、確かに元彧墓誌及び元顥墓誌も戍卒の反乱と

<sup>21</sup> 『北朝隋代墓誌所在総合目録』、No.483。

<sup>22</sup> 『北朝隋代墓誌所在総合目録』、No.503。

して見方が一致している〔史料6〕〔史料7〕。しかし、韓買墓誌をみると事情はもっと複雑である。「正光之末、數屬屯否、餓隸黥徒、蝟起鼻磔、役散驪山之下、盜聚綠林之中、雜種曾渠、遠近相扇、懷朔一鎮、獨在重圍」とあり、戍卒の逃亡だけでなく、雜種の曾渠が参加することによって広がりを得たことがわかる〔史料4〕。元淵の上表にも「今六鎮俱叛、二部高車亦同惡黨」とあり、兵士の反乱は間もなく高車の民族反乱に広がったことがわかる〔史料5〕。『魏書』卷9 肅宗紀正光五年(524)夏四月条に、「夏四月、高平曾長胡琛反、自稱高平王、攻鎮以應拔陵」とあることもその例証となる。

○史料8 『北齊書』卷27 破六韓常伝

破六韓常、字保年、附化人、匈奴單于之裔也。右谷蠡王潘六奚沒於魏、其子孫以潘六奚為氏、後人訛誤、以為破六韓。世領部落、其父孔雀、世襲曾長。孔雀少驍勇。時宗人拔陵為亂、以孔雀為大都督・司徒・平南王。

○史料9 『周書』卷15 于謹伝

謹兼解諸國語、乃單騎入賊、示以恩信。於是西部鐵勒曾長乜列河等、領三萬餘戶並款附、相率南遷。廣陽王欲與謹至折敷嶺迎接之。謹曰「破六汗拔陵兵衆不少、聞乜列河等歸附、必來要擊。彼若先據險要、則難與爭鋒。今以乜列河等餌之、當競來抄掠、然後設伏以待、必指掌破之。」廣陽然其計。拔陵果來要擊、破乜列河於嶺上、部衆皆沒。謹伏兵發、賊遂大敗、悉收得乜列河之衆。魏帝嘉之、除積射將軍。

○史料10 『北齊書』卷17 斛律金伝

斛律金、字阿六敦、朔州勅勒部人也。高祖倍侯利、以壯勇有名塞表、道武時率戶內附、賜爵孟都公。祖幡地斤、殿中尚書。父大那瓌、光祿大夫・第一領民曾長。天平中、金貴、贈司空公。金性敦直、善騎射、行兵用匈奴法、望塵識馬步多少、嗅地知軍度遠近。初為軍主、與懷朔鎮將楊鈞送茹茹主阿那瓌還北。王瓌見金射獵、深歎其工。後瓌入寇高陸、金拒擊破之。正光末、破六韓拔陵構逆、金擁衆屬焉、陵假金王號。

○史料11 『周書』卷14 賀拔勝伝

賀拔勝字破胡、神武尖山人也。其先與魏氏同出陰山。有如回者、魏初為大莫弗。祖爾頭、驍勇絕倫、以良家子鎮武川、因家焉。獻文時、茹茹數為寇、北邊患之。爾頭將遊騎深入胡侯、前後以八十數、悉知虜之倚伏。後雖有寇至、不能為害。以功賜爵龍城侯。父度拔、性果毅、為武川軍主。

實際のところ、最初に立ち上がった破落干拔陵も一介の戍卒ではない。破落干拔陵は曾長一族の出身であり〔史料8〕、拔陵の下には西部鉄勒曾長乜列河らが参加していた〔史料9〕。反乱の側に立った斛律金や鎮將の側に立った賀拔勝は、いずれもこのような曾長層の出身であってともに軍主の地位についていた〔史料10〕〔史料11〕。これらのことかすれば、拔陵もまた軍主クラスであった可能性が高い。広陽王淵が「一生推遷、不過軍主」というように、軍主の地位は極めて低い〔史料5〕。しかし、通常の郡県とは違って民政組織をもたない六鎮社会における軍主の地位は、必ずしも郡県社会と同じとはいえない。『魏書』卷41 源賀伝附懷伝に引く源懷の上表に、「景明以來、北蕃連年災旱、高原陸野、不任

營殖、唯有水田、少可菑畝。然主將參僚、專擅腴美、瘠土荒疇給百姓、因此困弊、日月滋甚。諸鎮水田、請依地令分給細民、先貧後富、若分付不平、令一人怨訟者、鎮將已下連署之官、各奪一時之祿、四人已上奪祿一周」とあるのは、本来なら郡県の官僚が担うべき役割を鎮將以下の軍官が担っていたことを示す。そのなかで軍主は在地社会を代表する存在であった。このような軍主を担う曾長層が蜂起した結果、六鎮が次々と陥落していったのは、六鎮社会において曾長層が果たす役割がいかに大きかったかを示す。

しかし、六鎮が次々と陥落するなかで、ひとり援軍を待ちながら、一年半以上の長きにわたって籠城を続けたのが懷朔鎮であった。このことは懷朔鎮が六鎮の中でも特殊な性格をもっていたことを示す。以下、六鎮における懷朔鎮の位置について述べる。楊鈞墓誌に「都督懷朔沃野武川三鎮諸軍事・懷朔鎮大都督」とある〔史料1〕。懷朔鎮は六鎮中の西方三鎮を統括する都督府が置かれていた鎮であった〔表3〕。六鎮の乱の起点となった高闕戍もこの懷朔鎮の都督区に含まれたことは疑いない。というのも、『周書』楊寬伝に「屬鈞出鎮恒州、請從展効、乃改授將軍・高闕戍主」とあり、楊鈞が恒州刺史となったとき、その子の楊寬は高闕戍主となっている〔史料3〕。そして楊鈞が懷朔大都督であったときに六鎮の乱は勃発している。その間に楊鈞は一旦廷尉卿となって中央に戻っているから、六鎮の乱勃発時の高闕戍主は楊寬ではなかったであろうが、『魏書』楊鈞伝に「拜恒州刺史、轉懷朔鎮將。所居以強濟稱」とあることからすれば、楊鈞は恒州刺史、懷朔鎮將の時代に北辺社会に対して強い指導力を発揮したようである〔史料2〕<sup>28</sup>。六鎮の乱が起こったとき、六鎮の西部地域を統括していた鎮將は、実は元淵の言うような凡庸な人物ではなくて、却って有能で野心的な楊鈞であったことに注意する必要がある。

そもそも鎮將に漢人が就くことは稀であり〔表2〕、しかも〔史料1〕に「會茹茹内亂、唐黎播越、綏來觀釁、事委深筭」とあるごとく、楊鈞の懷朔鎮將就任は来降してきた柔然の阿那瓌を処遇するという特殊な任務を帯びていた。さらに、〔史料5〕の(C)にあるごとく、この処遇をめぐる失敗は、辺民に「輕中國」の感情を懐かせることになり、六鎮の乱を導く原因の一つとなった。こうしてみると、北魏末の六鎮の乱は、むしろこの楊鈞の懷朔鎮將就任と深い因縁をもっていたのである。

#### 四 六鎮の変容と懷朔鎮

○史料1 2 『魏書』卷4 上世祖紀上神䴥二年(429) 条

冬十月、振旅凱旋于京師、告於宗廟。列置新民於漠南、東至濡源、西暨五原・陰山、竟三千里。詔司徒平陽王長孫翰・尚書令劉潔・左僕射安原・侍中古弼鎮撫之。

○史料1 3 『魏書』卷103 高車伝

後世祖征蠕蠕、破之而還、至漠南、聞高車東部在已尼陂、人畜甚衆、去官軍千餘里、將遣左僕射安原等討之。司徒長孫翰・尚書令劉潔等諫、世祖不聽、乃遣原等并發新附高

<sup>28</sup> 『北齊書』卷25 張亮伝に「亮性質直、勤力強濟、深為高祖・世宗所信、委以腹心之任。」とあり、『隋書』卷43 楊處綱伝に「處綱雖無才藝、而性質直、在官強濟、亦為當時所稱。」とあることからすれば、「強濟」とは行政手腕を発揮することである。

車合萬騎、至于已尼陂、高車諸部望軍而降者數十萬落、獲馬牛羊亦百餘萬、皆徙置漠南千里之地。乘高車、逐水草、畜牧蕃息、數年之後、漸知粒食、歲致獻貢、由是國家馬及牛羊遂至于賤、氈皮委積。高宗時、五部高車合聚祭天、衆至數萬。大會、走馬殺牲、遊逸歌吟忻忻、其俗稱自前世以來無盛於此。會車駕臨幸、莫不忻悅。後高祖召高車之衆隨車駕南討、高車不願南行、遂推袁紇樹者為主、相率北叛、遊踐金陵、都督宇文福追討、大敗而還。又詔平北將軍・江陽王繼為都督討之、繼先遣人慰勞樹者。樹者入蠕蠕、尋悔、相率而降。

○史料 1 4 『魏書』卷 44 孟威傳

時四鎮高車叛投蠕蠕、高祖詔威曉諭禍福、追還逃散、分配為民。

○史料 1 5 『魏書』卷 16 江陽王繼傳

高車酋帥樹者擁部民反叛、詔繼都督北討諸軍事。自懷朔已東悉稟繼節度。(中略)太師高陽王雍・太傅清河王懌・太保廣平王懷及門下八座、奏追論繼太和中慰諭高車、安輯四鎮之勳、增邑一千五百戶。

ここでそもそも六鎮は何か振り返っておこう。六鎮の始まりは、太武帝が柔然に壊滅的な打撃を与えた後、已尼陂(バイカル湖)周辺にいた東部高車の民を漠南に列置し、これを「鎮撫」したことにある〔史料 1 2〕。北魏は毎年柔然が攻めてくる秋から冬の時期にかけて平城から莫大な兵力を送り高車の民を庇護するかわりに、彼らから牛馬の貢納を受けて共存共栄の関係を構築した<sup>24</sup>。〔史料 1 2〕によれば、はじめ高車を鎮撫させたのは長孫翰・劉潔・安原・古弼の四人であり、また〔史料 1 4〕に「四鎮高車」とあり、〔史料 1 5〕に「慰諭高車、安輯四鎮之勳」とあることからすれば、いわゆる六鎮の中でもこの時特に高車を鎮撫するために置かれたのは四鎮であったと考えられる。また〔史料 1 5〕からその四鎮とは懷朔鎮以東の四鎮であり、すなわち懷朔、武川、撫冥、柔玄、懷荒、禦夷諸鎮中の四鎮であったことがわかる。よって、その四鎮とはいずれも懷柔の意味が込められた懷朔、撫冥、柔玄、懷荒の四鎮であった可能性が高い<sup>25</sup>。すなわち、本来の懷朔鎮の目的は、他の鎮と並んで高車を始めとする北方遊牧民族を鎮撫して漠南に定着させることにあった。

○史料 1 6 『魏書』卷 9 肅宗紀正光五年(524)八月詔

諸州鎮城人、本充牙爪、服勤征旅、契闊行間、備嘗勞劇。逮顯祖獻文皇帝、自北被南、淮海思乂、便差割強族、分衛方鎮。高祖孝文皇帝、遠遵盤庚、將遷嵩洛、規遏北疆、蕩關南境、選良家曾附、增戍朔垂、戎捍所寄、實惟斯等。

○史料 1 7 『魏書』卷 41 源賀傳附懷傳

懷旋至恒代、案視諸鎮左右要害之地、可以築城置戍之處。皆量其高下、揣其厚薄、及儲糧積仗之宜、犬牙相救之勢、凡表五十八條。表曰「蠕蠕不羈、自古而爾。遊魂鳥集、水草為家、中國患者、皆斯類耳。歷代驅逐、莫之能制。雖北拓榆中、遠臨瀚海、而智臣

<sup>24</sup> 拙稿「北魏六鎮史の研究」(科研報告書『大青山一帯の北魏城址の研究』、2013年6月)。

<sup>25</sup> 武川鎮は道武帝の時代からあり、沃野鎮と禦夷鎮が六鎮の列に加わったのは洛陽遷都以後である。六鎮の設置についての詳しい経緯は、「北魏六鎮史の研究」を参照されたい。

勇將、力算俱竭、胡人頗遁、中國以疲。于時賢哲、思造化之至理、推生民之習業。量夫中夏粒食邑居之民、蠶衣儒步之士、荒表茹毛飲血之類、鳥宿禽居之徒、親校短長、因宜防制。知城郭之固、暫勞永逸。自皇魏統極、都於平城、威震天下、德籠宇宙。今定鼎成周、去北遙遠。代表諸蕃北固、高車外叛、尋遭旱饉、戎馬甲兵、十分闕八。去歲復鎮陰山、庶事蕩盡、遣尚書郎中韓貞・宋世量等檢行要險、防遏形便。謂準舊鎮東西相望、令形勢相接、築城置戍、分兵要害、勸農積粟、警急之日、隨便翦討。如此則威形增廣、兵勢亦盛。且北方沙漠、夏乏水草、時有小泉、不濟大衆。脫有非意、要待秋冬、因雲而動。若至冬日、冰沙凝厲、遊騎之寇、終不敢攻城、亦不敢越城南出、如此北方無憂矣。」世宗從之。今北鎮諸戍東西九城是也。遷驃騎大將軍。

○史料 18 『太平寰宇記』卷 36 靈州・廢懷遠縣

蘭山澤・六鎮三戍、按陸恭之『風土記』云、正始三年(506)、尚書源思禮(源懷)・侍郎韓貞撫巡蕃塞、以沃野鎮居南、(其)〔與〕蘭山澤・六鎮不齊、源別置三戍。

○史料 19 『玉海』卷 19 元魏六鎮

六鎮並在今馬邑・雲中・單于界。正始中(504-508)、源思禮以跋野(沃野)置鎮居南、與六鎮不齊、更立三戍亦在馬邑等郡界。

○史料 20 『水經注』卷 3 河水條

白道中溪水注之、水發源武川北塞中、其水南流逕武川鎮城、城以景明中(500-503)築、以禦北狄矣。

しかし、こうした鎮の性格は五世紀の後半に大きく変容する。劉宋の晋安王子勛の乱をきっかけとして、献文帝の時代に淮北四州を併合した結果、大量の兵力を南方に振り向けざるをえなくなったからである〔史料 16〕。その結果、源懷によって六鎮にも大改革が施された〔史料 17〕。その大改革とは、第一に、鎮を充実させるための入植がおこなわれたこと〔史料 16〕、第二に、鎮の再配置と城戍の増設によって北緯 41 度附近に一列に並ぶ防衛ラインが築かれたこと〔史料 18〕〔史料 19〕〔表 1〕〔図 1〕<sup>26</sup>、第三に、鎮に城郭と倉庫が設置され、籠城の設備が整えられたこと〔史料 17〕、そして第四に、都督制が導入され、鎮の組織化が図られたことである〔表 3〕<sup>27</sup>。この中で懷朔鎮は、沃野、懷朔、武川の西方三鎮を管轄する六鎮中の重鎮へと発展していったのである〔史料 1〕。

## 五 阿那瓌の投降と楊鈞の懷朔鎮將就任

○史料 21 『魏書』卷 69 袁翻伝

神龜末(520)、遷冠軍將軍・涼州刺史。時蠕蠕主阿那瓌・後主婆羅門、並以國亂來降、朝廷問翻安置之所。翻表曰「(中略)自ト惟洛食、定鼎伊藻、高車・蠕蠕迭相吞噬。始則蠕蠕衰微、高車強盛、蠕蠕則自救靡暇、高車則僻遠西北。及蠕蠕復振、反破高

<sup>26</sup> この時、沃野鎮が北に移され、御夷城が御夷鎮に昇格した。「北魏六鎮史の研究」参照。

<sup>27</sup> 管見の限り、孝文帝以前に六鎮に都督制がしかれていた事実はない。「北魏六鎮史の研究」参照。

車、主喪民離、不絕如綫。而高車今能終雪其耻、復摧蠕蠕者、正由種類繁多、不可頓滅故也。然鬪此兩敵、即卞莊之算、得使境上無塵數十年中者、抑此之由也。(中略)今蠕蠕雖主奔於上、民散於下、而餘黨實繁、部落猶衆、處處碁布、以望今主耳。高車亦未能一時并兼、盡令率附。(中略)又高車土馬雖衆、主甚愚弱、上不制下、下不奉上、唯以掠盜為資、陵奪為業。河西捍禦強敵、唯涼州·敦煌而已。涼州土廣民希、糧仗素闕、燉煌·酒泉空虛尤甚、若蠕蠕無復豎立、令高車獨擅北垂、則西顧之憂、匪旦伊夕。愚謂蠕蠕二主、皆宜存之、居阿那瓌於東偏、處婆羅門於西裔、分其降民、各有攸屬。那瓌住所、非所經見、其中事勢、不敢輒陳。其婆羅門請修西海故城以安處之。西海郡本屬涼州、今在酒泉直北、張掖西北千二百里、去高車所住金山一千餘里、正是北虜往來之衝要、漢家行軍之舊道、土地沃衍、大宜耕殖。非但今處婆羅門、於事為便、即可永為重戍、鎮防西北。宜遣一良將、加以配衣、仍令監護婆羅門。凡諸州鎮應徙之兵、隨宜割配、且田且戍。雖外為置蠕蠕之舉、內實防高車之策。一二年後、足食足兵、斯固安邊保塞之長計也。」

○史料 2 2 『魏書』卷 103 蠕蠕傳

九月、蠕蠕後主俟置伐來奔懷朔鎮、阿那瓌兄也、列稱規望乞軍、并請阿那瓌。十月、錄尚書事高陽王雍·尚書令李崇·侍中侯剛·尚書左僕射元欽·侍中元叉·侍中安豐王延明·吏部尚書元脩義·尚書李彥·給事黃門侍郎元纂·給事黃門侍郎張烈·給事黃門侍郎盧同等奏曰「竊聞漢立南·北單于、晉有東·西之稱、皆所以相維禦難、為國藩籬。今臣等參議以為懷朔鎮北土名無結山吐若奚泉、敦煌北西海郡即漢晉舊障、二處寬平、原野彌沃。阿那瓌宜置西吐若奚泉、婆羅門宜置西海郡、各令總率部落、收離聚散。其爵號及資給所須、唯恩裁處。彼臣下之官、任其舊俗。阿那瓌所居、既是境外、宜少優遣、以示威刑。請沃野·懷朔·武川鎮各差二百人、令當鎮軍主監率、給其糧仗、送至前所、仍於彼為其造構、功就聽還。諸於北來、在婆羅門前投化者、令州鎮上佐準程給糧、送詣懷朔阿那瓌、鎮與使人量給食廩。在京館者任其去留。阿那瓌草創、先無儲積、請給朔州麻子乾飯二千斛、官駝運送。婆羅門居於西海、既是境內、資衛不得同之。阿那瓌等新造藩屏、宜各遣使持節馳驛先詣慰喻、并委經略。」肅宗從之。

○史料 2 3 『魏書』卷 78 張普惠傳

正光二年(521)、詔遣楊鈞送蠕蠕主阿那瓌還國。普惠謂遣之將貽後患、上疏曰「臣聞乾元以利貞為大、非義則不動、皇王以博施為功、非類則不從。故能始萬物而化天下者也。伏惟陛下叡哲欽明、道光虞舜、八表宅心、九服清晏。蠕蠕相害於朔垂、妖師扇亂於江外、此乃封豕長蛇、不識王度、天將悔其罪、所以奉皇魏。故荼毒之、辛苦之、令知至道之可樂也。宜安民以悅其志、恭己以懷其心。而先自勞擾、艱難下民、興師郊甸之內、遠投荒塞之外、救累世之勁敵、可謂無名之師。諺曰『唯亂門之無過』、愚情未見其可。當是邊將窺竊一時之功、不思兵為凶器、不得已而用之者也。夫白登之役、漢祖親困之。樊噲欲以十萬眾橫行匈奴中、季布以為不可、請斬之。千載以為美。況今旱酷異常、聖慈降膳、乃以萬五千人使楊鈞為將而欲定蠕蠕、忤時而動、其可濟乎。阿那瓌投命皇朝、撫之可也、豈容因疲我兆民以資天喪之虜。昔莊公納子糾、以致乾時之敗、魯僖以邾國、而有懸胛之恥。今蠕蠕時亂、後主繼立、雖云散亡、姦虞難抑。脫有井陘之慮、楊鈞之肉其可食乎。高車·蠕蠕、連兵積年、飢饉相仍、須其自斃、小亡大傷、然後一舉而并之。此

卞氏之高略、所以獲兩虎、不可不圖之。今土山告難、簡書相續、蓋亦無能為也、正與今舉相會、天其或者欲以告戒人、不欲使南北兩疆、並與大眾。脫狂狡構間於其間、而復事連中國、何以寧之。今宰輔專欲好小名、不圖安危大計、此微臣所以寒心者也。那瑰之不還、負何信義。此機之際、北師宜停。臣言不及義、文書所經過、不敢不陳。兵猶火也、不戢將自焚。二虜自滅之形、可以為殷鑒。伏願輯和萬國、以靜四疆、混一之期、坐而自至矣。臣愚昧多違、必無可採、匹夫之智、願以呈獻。」

○史料 2 4 『魏書』卷 103 蠕蠕傳

(正光)三年(522)十二月、阿那瓌上表乞粟以為田種、詔給萬石。四年(523)、阿那瓌衆大飢、入塞寇抄、肅宗詔尚書左丞元孚兼行臺尚書持節諭之。孚見阿那瓌、為其所執、以孚自隨、驅掠良口二千、公私驛馬牛羊數十萬北遁、謝孚放還。詔驃騎大將軍・尚書令李崇等率騎十萬討之、出塞三千餘里、至瀚海、不及而還。俟匿伐至洛陽、肅宗臨西堂、引見之。五年、婆羅門死於洛南之館、詔贈使持節・鎮西將軍・秦州刺史・廣牧公。

○史料 2 5 『魏書』卷 18 太武五王列傳

孚持白虎幡勞阿那瓌於柔玄・懷荒二鎮間。阿那瓌衆號三十萬、陰有異意、遂拘留孚、載以輜車、日給酪一升、肉一段。每集其衆、坐孚東廂、稱為行臺、甚加禮敬。阿那瓌遂南過至舊京、後遣孚等還、因上表謝罪。有司以孚事下廷尉、丞高謙之云孚辱命、處孚流罪。

○史料 2 6 『北史』卷 56 魏蘭根傳

正光末(正しくは正光四年)、尚書令李崇為大都督、討蠕蠕、以蘭根為長史。因說崇曰「緣邊諸鎮、控攝長遠、昔時初置、地廣人稀、或徵發中原強宗子弟、或國之肺腑寄以爪牙。中年以來、有司乖實、號曰府戶、役同廝養、官婚班齒、致失清流。而本宗舊類、各各榮顯、顧瞻彼此、理當憤怨。宜改鎮立州、分置郡縣。凡是府戶、悉免為平人、入仕次第、一準其舊。此計若行、國家庶無北顧之慮。」崇以奏聞、事寢不報。

○史料 2 7 『魏書』卷 103 蠕蠕傳

是歲(524)、沃野鎮人破六韓拔陵反、諸鎮相應。孝昌元年春(525)、阿那瓌率衆討之、詔遣牒云具仁贖雜物勞賜阿那瓌、阿那瓌拜受詔命、勒衆十萬、從武川鎮西向沃野、頻戰克捷。四月、肅宗又遣兼通直散騎常侍・中書舍人馮雋使阿那瓌、宣勞班賜有差。阿那瓌部落既和、士馬稍盛、乃號敕連頭兵豆伐可汗、魏言把攬也。

六鎮の乱はこの懷朔鎮の管轄内で起こった。そこで次に 523 年という時期が上記に述べた懷朔鎮の性格とどのようにかかわるかという問題がある。すでに見たように、柔然の阿那瓌の投降と楊鈞の懷朔鎮將就任とは直接のつながりがある〔史料 1〕〔史料 3〕。当時、アルタイ山脈を拠点とする高車が強勢となっており、柔然はこれに敗れて弱体化していた〔史料 2 1〕。分裂した柔然主の阿那瓌と婆羅門が相繼いで降伏してきたことで、朝廷は阿那瓌を懷朔鎮の北に置き、婆羅門を敦煌に置いて高車に対する藩屏とする策を取る〔史料 2 2〕。このうち、阿那瓌を懷朔鎮の北に安置する使命を担ったのが懷朔鎮將の楊鈞であった。しかし、張普惠が厳しく指弾しているように、これは「累世之勁敵」を救う行為でもあった。しかも「當是邊將窺竊一時之功、不思兵為凶器、不得已而用之者也」とあること

からすれば、楊鈞自身がこの施策に積極的に関わっていたと考えられる〔史料23〕。時あたかも元叉専権の時代であり、楊鈞はこの元叉に取り入ろうとしていた<sup>28</sup>。つまりは、この時の柔然安置策は、積年の北辺問題を解決することで功名を建てようとする元叉と、その意を受けて出世を果たそうとする楊鈞の野心になるものらしいのである<sup>29</sup>。ゆえに楊鈞が柔然と緊密な関係をもっていたことは、後に懷朔鎮陥落時に子の楊寬が柔然に逃げていることから明らかである〔史料3〕。

この時、阿那瓌を北に送る役割を担わされたのは、「沃野・懷朔・武川鎮各差二百人、令當鎮軍主監率」とあるように、楊鈞の都督区内の三鎮の軍主であった〔史料22〕。しかも、楊鈞は阿那瓌を統御できず、北辺一体は阿那瓌の蹂躪を受ける〔史料24〕〔史料25〕。そこで李崇が阿那瓌討伐に派遣されるが、功績を挙げられなかった李崇は六鎮に対する郡県制の導入を上表する〔史料26〕。この郡県制導入の目的は、この時の李崇らそして〔史料5〕の元淵、〔史料16〕の肅宗孝明帝の詔の立場は一貫して低い地位に置かれた府戸を解放することにある。しかし、それまで六鎮には軍政系統の行政組織しかなく、しかもその軍政組織の末端は曾長層が占めていたのであるから、そこにおける郡県制の導入は、六鎮社会に対する官僚的支配を強化することになり、むしろそれこそが郡県制導入の主眼であったのではなかろうか。これらのことが曾長にとって北魏、とりわけ鎮將の楊鈞に対する強い憤りに結びついたと想像することは難しくない。事実、高車の曾長の斛律金は、まさに軍主として楊鈞に従って阿那瓌を北に送ったのち、阿那瓌の蹂躪に対して戦い、そして破落干拔陵の反乱軍に加わるのである〔史料10〕。同じような経歴を辿りながら最後まで懷朔鎮に殉じた韓買との違いがどこにあるかは問題であるが、墓誌を見る限り韓買が曾長層であったことを示す記述はなく、あるいは完全なる鎮の城民となっていたことに原因があるかも知れない〔史料4〕。

阿那瓌は朝廷の求めに応じて六鎮の反乱軍を破り、可汗として復活を遂げた〔史料27〕。鎮民は散り散りとなって南下を余儀なくされた。そもそもこれらの諸部族は、太武帝が柔然を漠南から追い払ったあと、柔然に対する藩屏として安置されたものである。柔然が再び彼らの草原に入ってくれば、彼らの權益だけでなく生存すら脅かす存在になりかねないことは彼らには自明のことであつたろう。にもかかわらず、北魏が柔然を漠南に引き入れ、なおかつ制御が及ばないことが明らかになったとき、彼らはもはや自立の道を歩むほかなかった。〔史料5〕に言うところの「輕中國」とはそうした感情であり、それこそまず最初に鎮民をして反乱に立ち上がらせた感情であつたと思われる。

## ま と め

<sup>28</sup> 『魏書』卷58 楊播伝附昱伝「久之、轉太尉掾、兼中書舍人。靈太后嘗從容謂昱曰、『今帝年幼、朕親萬機、然自薄德化不能感親姻、在外不稱人心、卿有所聞、慎勿諱隱。』昱於是奏揚州刺史李崇五車載貨、恒州刺史楊鈞造銀食器十具、並餉領軍元叉。靈太后召叉夫妻泣而責之。又深恨之。」とある。

<sup>29</sup> このことはシンポジウムにおける会田大輔博士のコメントで御示唆を受けた。

本報告の要点は以下のとおりである。

1. 六鎮の乱で主導的な役割を果たしたのは酋長層であり、彼らはまた鎮の軍主層でもあった。
2. 反乱の直接のきっかけは、北魏が柔然を漠南に引き入れたことで、彼らの生存が脅かされたことにある。
3. その施策を積極的に進めたのは懷朔鎮將の楊鈞であり、そのため反乱はまず楊鈞が管轄する六鎮の西部地域で起こった。
4. 六鎮社会の変化は、遠くは劉宋の晋安王子勛の乱に由来し、さらには北アジアにおける高車や柔然の動きとも連動していた。
5. 少なくともその初期において、六鎮の乱は民族反乱としての性格をもった。

表1 北魏北辺城址位置							
番号	城址遺址	位置	標高	規模	地名比定	備考	厳耕望による比定
1	烏拉特后旗那仁宝力格蘇木古城址	40° 53' 36.96"N 106° 36' 57.12"E (城址西南角)	1135	北城、一辺40、南城、南北48×東西64	高闕戍	本報告書の黄論文を参照。	
2	烏拉特前旗根子場古城	41° 8' 48.57"N 108° 47' 55.08"E (城址北城垣)	1033	東西約1500×南北約500～600	沃野鎮	漢沃野県城から漢朔方故城を経て北に移された沃野鎮。	東経108度あたり、北緯41.5度
3	烏拉特前旗增隆昌古城	41° 11' 15.81"N 109° 34' 48.29"E (城址西南角)	1404	南北約315×東西約240	光禄城		
4	包頭市九原区哈德門溝古城	40° 41' 9.37"N 109° 38' 31.15"E (城址南垣)	1116	南北212×東西197	旧懷朔鎮	郭建中「北魏泰常八年長城尋踪」は本遺跡を北魏の五原とみる。懷朔鎮は延和二年(433)まで五原に置かれた。	
5	固陽県白靈淖城忘劫古城	41° 12' 13.97"N 110° 8' 26.51"E (城址東南角)	1555	東西約1300×南北約1100	懷朔鎮	正光四年(523年)に朔州が置かれ、永熙三年(534年)に朔州が内遷して廃される。	東経109度から110度の間、北緯41度のやや北
6	武川県二份子古城	41° 21' 27.51"N 110° 41' 42.57"E (城址西南角)	1637	南北約744×東西690	武川鎮?	武川鎮とされる城址の一つ。	武川県内
7	達茂旗希拉穆仁城忘劫古城	41° 19' 23.81"N 111° 11' 26.04"E (城址西南角)	1603	南北426×東西452	武川鎮?	南北二城から成り、附近には遼金の故城址あり。武川鎮の所在地として有力視される。	
8	大青山郷下南灘古城	?			武川鎮?	三つの台基、城壁は未確認。かつてはここを武川鎮とする説もあったが、今日ではこの立場を取る研究者は少ない。	
9	武川県大青山郷土城梁古城	40° 57' N 111° 29' E (土城梁村所在)	1794	南城、南北110×東西102	軍事城塞	南城と規模の大きな北城からなる。北城の規模は不明。広徳殿の所在地とする説もあり。	
10	四子王旗烏蘭花土城子古城	41° 27' 34.39"N 111° 44' 17.69"E (城址西南角)	1533	一辺900の正方形	撫眞鎮	城中に三つの建築遺址。	東経112.5度くらい、北緯41.5度あたり
11	四子王旗庫倫図郷庫倫図古城	41° 36' 12.52"N 111° 59' 38.62"E (城址西南角)	1603	南北455×東西420	軍事城塞		
12	輝騰錫勒遺址	41° 07' N 112° 36' E	2046		九十九泉	海拔2000メートル、東西約50キロ、南北約20キロの間に遺跡が分布。	
13	察右后旗克里孟古城	41° 33' 55.55"N 112° 50' 16.55"E (城址西南角)	1465	南北700×東西1520	牛川城?	東牆330、西牆700、南牆1508、北牆1520の台形。ここを柔玄鎮とする説もある。	
14	興和県民族団結郷土城子古城	40° 59' 27.09"N 113° 48' 54.76"E (城址東北角)	1257	一辺約500の正方形	長川城	常謙「北魏長川古城遺址考略」による。	
15	河北省尚義県三工地鎮土城子古城	41° 15' 9.57"N 113° 57' 14.60"E (城址西南角)	1382	南北1003×東西1100	柔玄鎮	魏尚如・張智海「北魏柔玄鎮地望考述」による。	興和県の北、約東経114度、北緯41.5度
16	河北省張家口市張北県	41° 9' N 114° 42' E	1393		懷荒鎮		張北県附近、約東経115度のやや西、北緯41度のやや北

17	河北省張家口市沽源縣大紅城子城址	41° 43' 54.03"N 115° 43' 12.94"E (城址西南角)	1404	南北164×東西200	禦夷故城	成一農「太和年間北魏禦夷鎮初探」(『北大史學』第5輯、1998年)による。規模はGoogle earthでの計測。	
18	河北省張家口市赤城縣貓峪村古城址	41° 8' 6.47"N 115° 44' 57.08"E (城址西南角)	1078	南北146×東西161	禦夷鎮	成一農「太和年間北魏禦夷鎮初探」によれば、独石口郷南1里に独石(城?)があり、さらに河に沿って南下し猫峪堡の西南500mのところに古城址があるという。	独石口鎮あるいはその東数十里
19	河北省張家口市赤城縣	40° 54' N 115° 49' E	893		赤城鎮		赤城縣の南数十里

塔拉主編『草原考古学文化研究』をもとに備考に挙げた他の資料を参照しながら作成。経緯度と高度の数字は全てGoogle earthの表示による。城壁の規模のデータは参考までに主な数字を挙げたものであり、全てのデータを反映させているわけではない。

表1から表3および図1は、いずれも拙稿「北魏六鎮史の研究」(『大青山一帯の北魏城址の研究』、2013年6月)より転載。

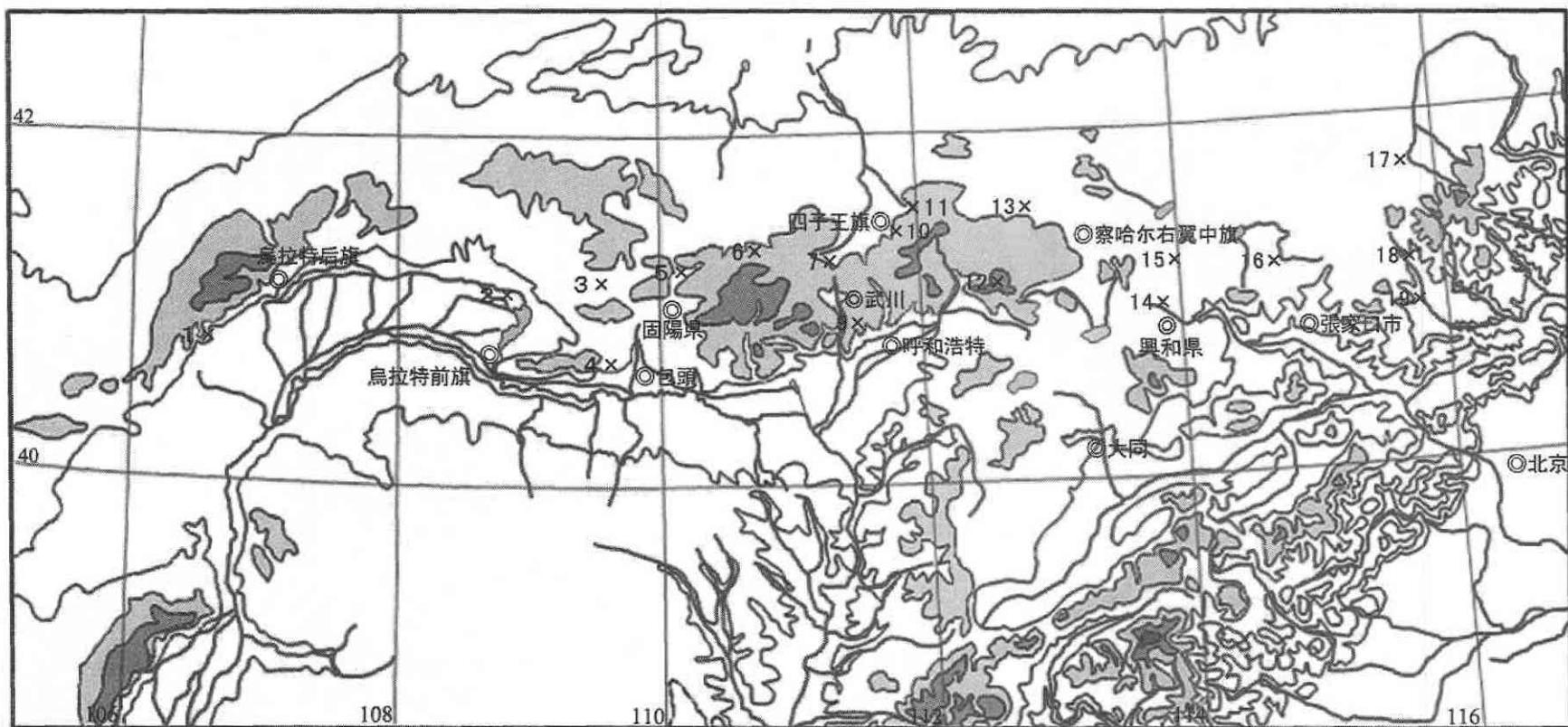


图 1 北魏北边城址位置图 (内蒙古自治区地图制印院『内蒙古自治区集』中国地图出版社、2007年10月、10-11頁をもとに作成)

表2 六鎮鎮將表						
時代	名	出自	爵位	將軍號	鎮將	出典
獻文帝	元長壽	景穆王子	城陽王	征西大將軍(前從1上、後2)	沃野鎮都大將	魏19/509
孝文帝	元鬱	景穆子孫	濟陰王		沃野鎮都大將	秦晉豫16
孝文帝	馮某	平城			沃野鎮將	安豐311
孝文帝	韓天生	安定安武			平北將軍(前從2上、後3)	沃野鎮將
宣武帝	慕容契	昌黎	定陶男	征虜將軍(前3上、後從3)	沃野鎮將	魏50/1123
宣武帝	于勁	外戚	富昌子	征虜將軍(前3上、後從3)	沃野鎮將	北23/844
宣武帝	于祚	外戚	鉅鹿郡開國公	振威將軍(前4中、後從4)	沃野鎮將	魏31/740
宣武孝明	慕容昇	昌黎		征虜將軍(前3上、後從3)	沃野鎮將	魏50/1123
宣武孝明	孟威	河南洛陽		龍驤將軍(前3上、後從3)	沃野鎮將	魏44/1006
時代	名	出自	爵位	將軍號	鎮將	出典
太武帝	可朱護野肱	遼東			懷朔鎮將	齊27/376
文成帝	慕容某	昌黎		平西將軍(前從2上、後3)	懷朔鎮都大將	秦晉豫16
孝文帝	元天賜	景穆王子	汝陰王	征北大將軍(前從1上、後2)	懷朔鎮大將	北17/639
孝文帝	元鬱	景穆子孫	濟陰王	征東大將軍(前從1上、後2)	懷朔鎮都大將	秦晉豫16
孝文帝	劉天興	定州中山			懷朔鎮將	碑校5/83
孝文帝	元頤	景穆子孫	陽平王	征西大將軍(前從1上、後2)	懷朔鎮大將	北17/630
孝文帝	元萇	平文子孫	艾陵伯		懷朔鎮都大將	北15/548
宣武帝	陸延	代	河南公	安北將軍(前2下、後3)	懷朔鎮大將	魏30/731
宣武帝	元尼須				懷朔鎮將	魏41/926
宣武帝	穆鑣	代			懷朔鎮將	魏27/677
宣武孝明	宇文福	河南洛陽		征北將軍(前從1中、後2)	懷朔鎮將	魏44/1002
宣武?	韓某	遼東徒何		冠軍將軍(後從3)	懷朔鎮將	晉陽75
孝明帝	于昕	代		揚烈將軍(前5上、後5品上)	懷朔鎮將	魏31/747
宣武孝明	鮮于寶業	漁陽			懷朔鎮將	齊41/539
孝明帝	段長	遼西			懷朔鎮將	北6/209
孝明帝	楊鈞	弘農華陰		假鎮北將軍(前從1下、後從2)	懷朔鎮大都督	駿台史學144
時代	名	出自	爵位	將軍號	鎮將	出典
孝文帝	長孫吳兒	代	南康公		武川鎮將	魏26/655
孝文帝	元英	景穆子孫	假魏公	平北將軍(前從2上、後3)	武川鎮都大將	魏19/495
孝文帝	元蘭	烈帝子孫	建陽子		武川鎮將	北15/558
孝文帝	元叱奴	昭成子孫		平北將軍(前從2上、後3)	武川鎮將	魏15/578、碑校4/297
宣武帝	陸延	代	河南公	安南將軍(前2下、後3)	武川鎮將	魏30/731
宣武孝明	苟愷	代	河東公	冠軍將軍(後從3)	武川鎮大將	魏44/994
宣武孝明	宇文永	昌黎棘城		鎮遠將軍(前從1下、後4下)	武川鎮將	秦晉豫23
孝明帝	于昕	代		揚烈將軍(前5上、後5品上)	武川鎮將	魏31/747
孝明帝	斛律謹	太安		龍驤將軍(前3上、後從3)	武川鎮將	齊20/266
孝明帝	侯莫陳少興	朔州武川			武川鎮將	庚子山集946
孝明帝	邢長山	河間鄭		冠軍將軍(後從3)	武川鎮將	碑校9/83
孝明帝	許彪				武川鎮將	地1092
時代	名	出自	爵位	將軍號	鎮將	出典
孝文帝	元繼	道武子孫	江陽王	安北將軍(前2下、後3)	撫冥鎮都大將	魏16/401、碑校6/272
孝文帝	元休	景穆王子	安定王	征北大將軍(前從1上、後2)	撫冥鎮大將	魏19/517
孝文帝	元業		魯郡侯		撫冥鎮將	魏27/663
孝文宣武	元篤	道武子孫			撫冥鎮將	魏16/395

時代	名	出自	爵位	將軍号	鎮將	出典
太武帝	羅斤	代	帶方公	平西將軍(前從2上、後3)	柔玄鎮都大將	魏44/988
太武帝	奚直	河南洛陽		平遠將軍?	柔玄鎮將	魏73/1629
孝文帝	李兜				柔玄鎮都將	魏73/1629
孝文帝	元繼	道武帝孫	江陽王	鎮北將軍(前從1下、後從2)	柔玄鎮大將	魏16/401, 碑校6/272
宣武	豆盧長	昌黎徒何			柔玄鎮將	周19/309
宣武孝明	苟愷	代	河東公	冠軍將軍(後從3下)	柔玄鎮大將	魏44/994
孝明帝	元鸞	平文子孫	晉陽男	龍驤將軍(前3上、後從3)	柔玄鎮大將	碑校7/277
時代	名	出自	爵位	將軍号	鎮將	出典
太武帝	元建	昭成子孫	陳留公	鎮北將軍(前從1下、後從2)	懷荒鎮大將	魏15/382
太武帝	郎孤				懷荒鎮將	魏40/902
太武帝	陸倕	代	建業公	平東將軍(前從2上、後3)	懷荒鎮大將	魏40/902
太武帝	郎孤				懷荒鎮將(再任)	魏40/902
太武帝	元比陵	道武帝孫	荷曼公	安遠將軍(前從3下、後4)	懷荒鎮大將	魏16/395
太武帝	司馬文思	河内温	譙王	征南大將軍(前從1上、後2)	懷荒鎮將	魏37/854
太武帝	于婆	河南洛陽			懷荒鎮將	周15/243
文成帝	李宝	隴西狄道	敦煌公	鎮北將軍(前從1下、後從2)	懷荒鎮將	魏38/885
孝文宣武	元繼	道武帝孫	江陽王	鎮北將軍?(前從1下、後從2)	懷荒鎮大將?	碑校6/272
宣武帝	達奚眷	代			懷荒鎮將	周19/303
宣武帝	萬貳				懷荒鎮將	魏72/1604
宣武帝	王居伏	西河			廻荒鎮將	隋彙3/154
宣武孝明	苟愷	代	河東公	冠軍將軍(後從3)	懷荒鎮大將	魏44/994
孝明帝	于景	代		征虜將軍(前3上、後從3)	懷荒鎮將	魏31/747
時代	名	出自	爵位	將軍号	鎮將	出典
太武帝	趙逸	天水		寧朔將軍(前4上、後從4下)	赤城鎮將	魏52/1145

本表は現在知りうる限りの鎮將を鎮ごとに列挙し、点線で洛陽遷都以前と以後に分けたものである。鎮將の就任時期の時代比定はごく大まかな目安を示すに過ぎず、あくまで洛陽遷都の前と後の趨勢を知るためのものである。以下、出典を示す。正史は全て中華書局の標点本の巻数と頁数である。魏=『魏書』。北=『北史』。齊=『北齊書』。周=『周書』。秦晋豫=趙君平・趙文成編『秦晋豫新出土墓誌蒐佚』(国家図書館出版社、2012年1月)頁数。安豊=賈振林『文化安豊』(大象出版社、2011年)頁数。碑校=毛遠明編『漢魏六朝碑刻校注』(線装書局、2008年12月)冊数/頁数。晋陽=太原市三晋文化研究会・『晋陽古刻選』編集委員会『晋陽古刻選—北魏墓誌卷』(山西出版集團・山西人民出版社、2008年1月)頁数。駿台史学144=堀井裕之「北魏・楊鈞墓誌」の訳注と考察』『駿台史学』第144号、2012年3月。庚子山集=清・倪瑤『庚子山集注』(中華書局、1980年10月)頁数。地=王仲華『北周地理志』(中華書局、1980年)頁数。隋彙=王其禕・周曉薇編『隋代墓誌銘彙考』(線装書局、2007年10月)冊数/頁数。北魏正光元年(520)「叔孫協墓誌」には太和六年に「平北將軍、懷朔鎮將」となったとあるが、偽刻の疑いがあるため除いた。

表3 都督六鎮表

時代	名	都督号	出典
孝文帝	楊播	加征虜將軍、都督北蕃三鎮	碑校4/307
孝文帝	元繼	都督柔玄・撫冥・懷荒三鎮諸軍事、鎮北將軍、柔玄鎮大將	魏16/401
宣武帝	慕容契	都督沃野・薄骨律二鎮諸軍事、沃野鎮將	魏50/1123
宣武帝	慕容契	都督禦夷・懷荒二鎮諸軍事、平城鎮將	魏50/1123
宣武帝	慕容契	都督朔州・沃野・懷朔・武川三鎮三道諸軍事、後將軍、朔州刺史	魏50/1123
宣武帝	陸延	都督沃野・武川・懷朔三鎮諸軍事、安北將軍、懷朔鎮大將	魏30/731
宣武帝	元淑	都督平城・禦夷・懷荒三鎮二道諸軍事、平城鎮將	碑校4/114、西市1/8
宣武帝	楊椿	都督朔州・撫冥・武川・懷朔三鎮三道諸軍事、平北將軍、朔州刺史	魏58/1286
孝明帝	宇文福	都督懷朔・沃野・武川三鎮諸軍事、征北將軍、懷朔鎮將	魏44/1001
孝明帝	元鸞	都督柔玄・懷荒・撫冥三鎮諸軍事、撫軍將軍、柔玄鎮大將	碑校7/277
孝明帝	楊鈞	都督恒州・柔玄・懷荒・禦夷三鎮二道諸軍事、恒州刺史	駿台史学144
孝明帝	楊鈞	都督懷朔・沃野・武川三鎮諸軍事、懷朔鎮大都督	駿台史学144

西市=胡戟・榮新江主編『大唐西市博物館藏墓誌』(北京大学出版社、2012年9月)冊数/頁数

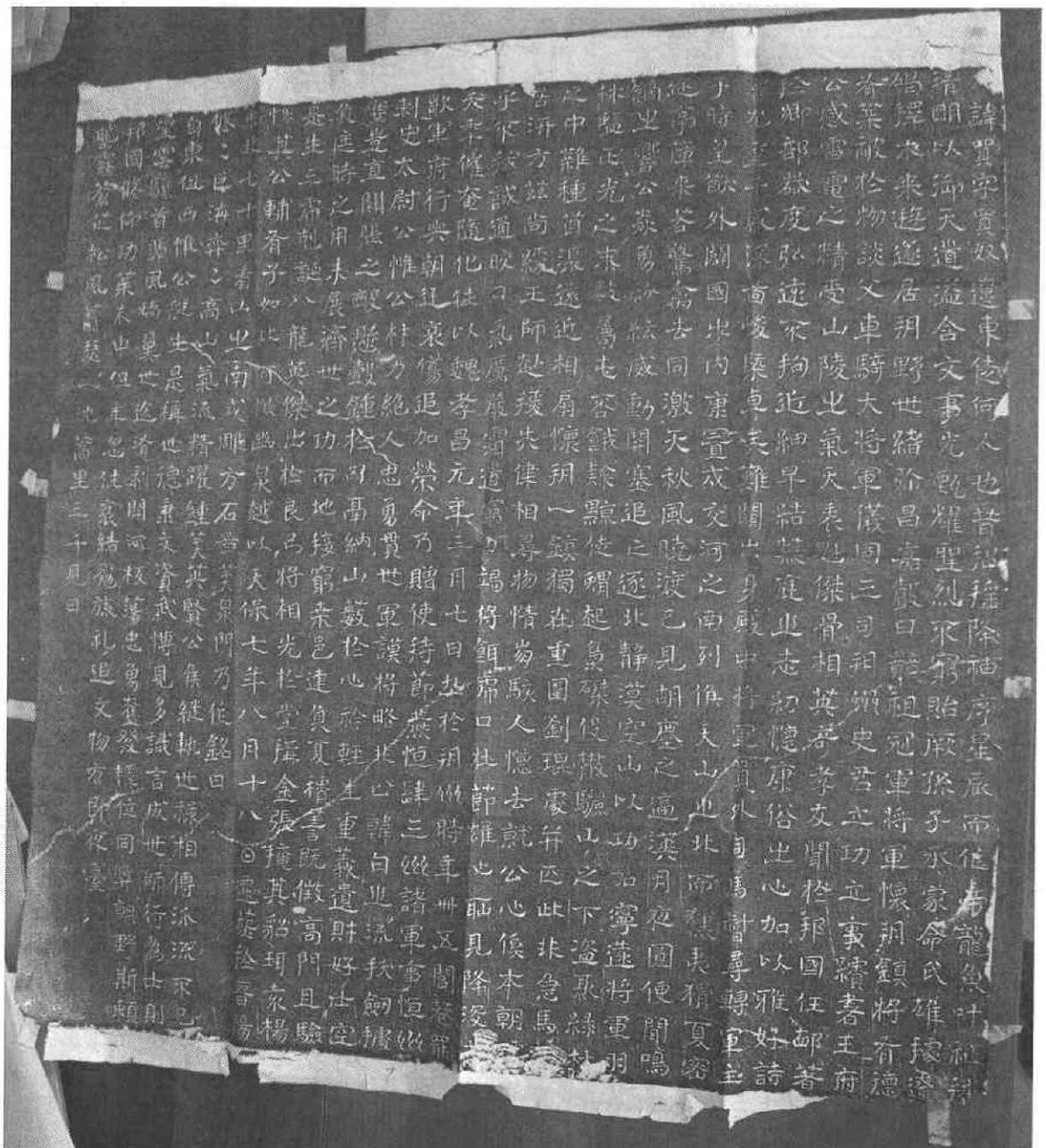


写真1 韓買墓誌 (太原市考古研究所藏拓本)